**「あまみエフエム　ディ！ウェイヴ」放送原稿〈８月１０日（金）放送分〉**

テーマ「奄美歳時記」

　あまみエフエム　ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。県立奄美図書館です。今週のこの時間は，今年度第５回目の，シリーズ「奄美歳時記」をお送りします。

　照りつける太陽が西へ沈んだ夕暮れ時，東から昇ってくるのは夏の大三角。ベガ，デネブ，アルタイルの三つの星が空高く輝く季節になりました。こと座のベガとわし座のアルタイルは，七夕の織姫と彦星，引き離された二つの星は，お互いの姿を望むように天の川のほとりに輝いています。

　昔，ベガは裁縫の仕事，アルタイルは農業の仕事をつかさどる星と考えられていました。この二つの星は旧暦七月七日に天の川をはさんで最も光り輝いているように見えることから，中国でこの日を一年一度のめぐりあいの日と考え，七夕の物語が生まれました。

　平安時代にその話が日本に伝わると，宮中行事として七夕行事が行われるようになりました。宮中の人々は桃や梨，なす，うり，大豆，干し鯛，アワビなどを供えて星をながめ，香をたいて，音楽を奏で，詩や歌を楽しみました。そして，サトイモの葉にたまった夜つゆを「天の川のしずく」と考えて，それで墨を溶かし梶の葉に和歌を書いて願い事をしていました。梶は古くから神聖な木とされ、祭具として多くの場面で使われていました。

　江戸時代になると，七夕は庶民の間にも広まり，全国的に行われるようになりました。人々は野菜や果物をそなえて，詩や歌，習いごとの上達を願いました。梶の葉のかわりに五つの色のたんざくに色々な願い事を書いて笹竹につるし，星に祈るお祭りと変わっていきました。冬でも緑を保ち，まっすぐ育つ生命力にあふれた笹や竹には，不思議な力があると言われていました。神聖な植物ゆえに，そこに神を宿すことができるとも言われており，祭りの後，竹や笹を飾りごと川や海に流す風習には，竹や笹にけがれを持っていってもらうという意味もあります。

　七夕伝説は，奄美大島では「天人女房」として羽衣伝説と結びついたような独特の物語となって伝わっています。情報誌「ホライゾン第５号」に嘉原カヲリさんが書かれた「奄美民話館」から，奄美の七夕物語「あもろうなぐ」を紹介しましょう。

「むかし，あたんちゅかな（昔，あったとさ）。天女が降りて来て，川で浴びていた。そこに男が通りかかり，かたわらの木にかけてある飛衣を隠してしまった。そして自分の

妻になったら返してやると言うので，天女は仕方なしに男の妻になった。やがて七年がたち，三人の子どもが生まれた。ある日のこと，一番上の子が末の子をおぶって，こんな歌をうたっていた。

”ヨイホーラ　ヨイホーラ　泣くな　坊ぐぁ
　六つまた倉ぐぁや　突きあけてぃ　母が飛衣や　取てぃくれぃろ～♪”

ところが，それを聞いた天女は大喜びで倉に上り，籾俵（もみだわら）の中に隠してある飛衣を見つけ出した。天女はそれを着て上の子は右の脇に，中の子は左脇に，下の子は背中におぶって，天へ昇っていった。

さて，家には天女が「千足のわらじを作って，きん竹（ちく）を植えて天に昇ってきなさい」と置き手紙をしてあった。男はさっそく天に昇っていった。ところがわらじが九百九十九足しかなく天にとどかなかった。するとちょうど，天女は機織りをしていたので，ヒジキ（おさ）を差し出して，それにつかまらせて昇らせた。しかし天女の親は男が気にいらない。それで男に仕事を言いつけた。それに対して，天女はつぎつぎに知恵を与えた。

まず，天女の親は七町歩（ななちょうぶ）の木をみんな伐（き）って来いと言いつけた。すると，天女は木を三本伐って寝ていなさいと教えた。そのとおりにすると翌朝木はみんな伐られていた。

次に天女の親は木を伐ったところをみんな耕して来いと言いつけた。すると，天女は三回耕して寝ていなさいと教えた。そのとおりにすると翌朝みんな耕されていた。

その次に天女の親はそこにシブリ（冬瓜（とうがん））を植えて来いと言いつけた。天女は種を三つ植えて寝ていなさいと教えた。そのとおりにすると翌朝みんな植えられていた。

それから次に天女の親はそれをみんな取って来いと言いつけた。すると，天女は横に切りなさいと教えた。

しかし，男はせめて今度はと，親の言うとおりに縦に切った。そうしたら，そのシブリから大水が出て，男は流されてしまった。なんとこれが天の川の始まりちゅかな（だとさ）。

そのとき天女は流される夫に月に一度会いましょうと叫んだのに，男は，年に一度会いましょうと聞き間違えてしまった。ちょうどその日がほら七月七日で，二人はそれから年に一度，七月七日の夜にだけ合うようになったちどー。なぁーじゃー（おしまい）。」

ベガは，地球から２５光年はなれた所にある太陽の約３倍の大きさの星です。一光年（こうねん）は光が一年で進む距離で約９兆 4600 億キロメートル。はるかかなたから届けられる星の光は，昔から世界中で多くの神話として語られています。夏の夜空の下で，星座探しのおもしろさや，神話の世界を楽しんでみませんか。

以上，県立奄美図書館でした。